そそのかす声たち

『結婚の生理学』における認識論的問題（1）

佐久間 隆

はじめに

『人間喜劇[1]』はしばしば、19 世紀前半のフランス社会全体をそのメカニスムとともに描いた一大壁画に喩えられる。事実、作家本人の構想においても、この文学的モニュメントの目標は、戸籍簿と張り合うこと、あらゆる社会的現象 —— バルザックは「社会的結果[2]」と呼ぶ —— を描写すること、その原因をあきらかにすること、そしてこれらの結果と原因をつなぐ原理を探求すること、であった。そこで、バルザックはあらゆるものに接近し、把握し、すべてを一つの大きな体系のかたちで描き出そうとする。ところが、この非常に激しく真摯な欲望のために、作家は必然的に、認識し表象すべき「現実（réel）」の新たな側面、言い換えれば彼の体系のもつ裂け目に絶えず直面し続けることになる。こうして、バルザックの体系的な探求には終わりがない。

現在、このような見方はさして独自なものではない。1980 年ごろに発表された一連の研究によって、リュシアン・ダーレンバックが見事に浮き彫りにしたのが、まさに、現実をその全体性において把握しようとするバルザックの意図と、実作品がはらむ断片的性格とのあいだの根本的矛盾の問題であった[3]。以来、『人間喜劇』の世界がもつ不均質な側面が、バルザック研究の重

---

[1] 『人間喜劇』については、Honoré de Balzac, *La Comédie humaine*, édition établie sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Pléiade », 1976-1981, 12 vol.を用い、注記、引用の際には略記する。注記に際しては *CH* とし、引用の際は *Physiologie du mariage* については第 11 巻の頁数のみ括弧内に記し、他の作品については、第 3 巻 55 ページなら（III, 55）のように記す。

[2] Lettre du 26 octobre 1834 in *Lettres à Madame Hanska*, éd. Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol., t. I, p. 204.

[3] とくに次の 2 編の論文が重要である。Cf. Lucien Dällenbach, « Du fragment au cosmos (*La Comédie humaine* et l'opération de lecture I) », in *Poétique*, n° 40, Éditions du Seuil, nov. 1979 ; « Le tout en morceau (*La Comédie humaine* et l'opération de lecture II) », in *Poétique*,

要なテーマの一角を占めてきた。われわれとしては、『結婚の生理学』を類似した観点から検討することは無駄ではないと考える。

『結婚の生理学』は、1829 年に「若き独身者」なる匿名で刊行され、のちに『人間喜劇』のなかの「分析的研究」セクションにおさめられた作品である。構成は 3 部 30 章からなり、はじめに「序言」が置かれている。

一般にこの作品については、二つの際立った特徴が指摘されてきた。ひとつは、結婚制度を通してのバルザックの社会批評であり、もうひとつは、諷刺的でおどけた文体である。社会批評にかんしては、『人間喜劇』において「結婚」は一大テーマであり、他の作品と結びつけて論じられてきた。一方、冗談めかした文体は執筆時の状況が大きく反映しているとされる。1820 年代、民法典や特にスイス人ラヴァターの観相学のパロディーとして、風俗スケッチや日常の振舞い方を面白おかしく伝え教える「法典もの」「方法もの」と呼ばれるジャンルの大衆本が大流行した。ブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』は「美食の法典もの」として大成功し、『結婚の生理学』はそれにあやかって、タイトルのみならず、「章」のかわりに「省察」という区分けを使用するなど、形式面でもいろいろ踏襲している。『結婚の生理学』は、「妻の姦通をいかに防ぐか」を教示する、という体裁をとって話が進むのだが、結局、姦通防止の不可能が確認され、最後は奇妙な姦通礼賛で幕を閉じる。「寝取られ亭主」のテーマ自体は、フランス文学にとって中世以来おなじみのものであり、ラブレーの『第三之書』やモリエールの『女房学校』といった作品が容易に想起される。実際、バルザック自身も『結婚の生理学』のなかで、ラブレーとモリエールに言及している[4]。とはいえ、論述的ディスクールにおける真面目な社会批評と冗談との混合はしばしば読者を困惑させ[5]、『結婚の生理学』というテクスト自体の価値、評価を一定させない。実際、このテクストは「読みようによって、フェミニストの声明書そして／あるいは女性蔑視のユーモレスク[6]」になるものだといえる。

---

n° 42, Éditions du Seuil, avril 1980.

[4] ラブレーへの言及はとくに省察 1 に見られ、また、モリエールに関するものは省察 7 の後半に見られる。

[5] 典型的な反応としては、次のカステックスのものを参照のこと。Voir Pierre-Georges Castex, « Notice » aux *Études analytiques* in *CH*, t. XI, p. 1717. 彼は『結婚の生理学』を「分類不可能な、面食らわせる本」（*ibid.*）と評している。ただし、その後彼の論調は、真面目な社会批評の部分のみ意味がある、というものへ傾く。

[6] Éric Bordas, « Instruire la femme quand on est un homme : Balzac, la *Physiologie du mariage* » in *L'Éducation des femmes en Europe et en Amérique du Nord de la Renaissance à 1848 : réalités et représentations*, éd. Guyonne Leduc, Paris-Montréal, L'Harmattan, 1997,

われわれとしては、こうした解釈のあいだで揺れるよりも、一貫しないディスクールそれ自体に注目し、そこに冒頭で言及した、現実を包括的に捉え表象したい作家の欲望とそうした形で統御され得ない現実とのあいだの相克の問題を関連させて考えてみたい。すでに、類似した問題意識にたって『結婚の生理学』を検討した研究もあるが[7]、本稿でわれわれはとくに、作品の「序言」に目を向けてみたい。というのも、「序言」において、著者自身が『結婚の生理学』の生成過程を振り返って説明しているからである。したがって、本稿の目的は、この作品の生成過程の説明において特徴的にあらわれる現象と、一貫しないディスクール、および、作家における現実認識・現実表象の問題とのあいだの関係を明らかにすることである。

その際、『結婚の生理学』のディスクールの主体について、気を付けなければならないだろう。この作品は小説ではないし、また初版で纏っていた「若き独身者」という匿名も数年後には止めてしまっているので、ディスクールの主体、すなわち、読み手にたいして「妻の姦通をいかに防ぐか」を教示する主体も作者バルザックそのひとのように見える。しかし、匿名を廃したのちも、「若き独身者が結婚について教授のように教える」という虚構の設定は残り続けている。したがって、「若き独身者」という属性を与えられた、虚構化されたディスクールの主体を、以下バルザックではなく「語り手」と呼ぶことにする。「序言」にかんしても同様である。そのうえで、「語り手」の現実認識等の問題圏が、他のバルザック作品、ひいては『人間喜劇』全体の問題に繋がっていくことを示したい。

1. そそのかす者たちの声

すでに述べたように、『結婚の生理学』の冒頭 —— より正確には、作品タイトルと献辞のあと —— におかれた「序言」のなかで、語り手はこの著作の生成過程を語る。彼は、さまざまな者に教唆され、なかば強いられるかたちでこの著作を書き進めた、とそこで何度も述べているが、興味深いのは、

---

p. 470.

[7] Catherine Nesci, *La femme mode d'emploi. Balzac, de la Physiologie du mariage à La Comédie humaine*, Lexington, French Forum Publishers, 1992.はフェミニスム的観点にたち、また Éric Bordas, « Au commencement était l'impossible (la *Physiologie du mariage*) » in *Balzac ou la tentation de l'impossible*, SEDES, 1998. は文体論的アプローチを採っている。

語り手を唆すのが一連の具体的な声だ、ということである。それらの声は彼自身のものではなく、かといって外部からの命令でもなく彼自身の内部に響く。

まず、「序言」の書き出しをみてみよう。

> 「結婚というものは自然から発したものではない。―― 東洋の家族と西洋の家族はまったく違う。―― 人間は自然の意図の執行者であって、社会は自然のうえに築かれにやって来る。」
>
> だから結婚にも、あらゆる人間的事象が従う漸進的改善をほどこすことが可能である。
>
> 『民法典』を議論する際にナポレオンが参事院で発したこれらの言葉に、本書の著者である私は大いなる感銘を受けた。そしておそらく、知らないあいだに、これらの言葉によって、今日読者に供している本書の種が私のなかに蒔かれたのであろう。(903-904)

バルザックが早くから結婚についての法律問題に関心を持っていたことを、この書き出しはよく示しているといえる[8]。実際、続けて語り手は、民法典の中にあった「姦通」の文字に若いころの自分が強く反応し、悲惨な家庭の情景を想像した、と書く。しかしわれわれにとって重要なのは、作品のはじまりに他人によって発せられた言葉があった、ということである。「発せられた言葉（paroles prononcées）」という表現や発話状況の提示によって、語り手を触発したナポレオンの声の存在が想起される。

さらにここで注目すべきは、書き出しの構成である。上の引用に見られるように、この部分は三つの段落からなっている（ただし、第 3 段落には続きがある）。まず第 1 段落で、読者は唐突に、ギユメで括られた言葉に直面させられる。結婚に関する考えを述べたこれらの言葉に続いて、第 2 段落では、やはり結婚に関する考えが今度はギユメなしで提示され、そこに含まれる「だから（donc）」という語が、第 2 段落が第 1 段落の考えの論理的帰結であることを示す。そして第 3 段落において、すでに提示された「これらの言葉」の発話状況が説明され、それが『結婚の生理学』執筆の出発点に結び付けられる。ここで、われわれはひとつの疑問に逢着する。このように構成された書き出しにおいて、ギユメなしに示された第 2 段落の考えは、ナポレオンのものなのだろうか、あるいは語り手のものなのだろうか？　第 3 段落の「ナポ

[8] Voir Arlette Michel, *Le mariage et l'amour dans l'œuvre romanesque d'Honoré de Balzac*, Champion, 1976, 4 vol., t. I, pp. 341-349.

レオンが参事院で発したこれらの言葉」という表現を受けて、第1段落のギユメに括られた言葉は、当然ナポレオンの言葉の直接的引用とみなされる。しかし、続く第2段落の言葉は、ギユメに括られずに提示されながら、同時に「ナポレオンが参事院で発したこれらの言葉」という表現の直前に置かれている。そのため、第2段落で提示された考えは、はたして第1段落に示されたナポレオンの言葉から語り手自身が引き出した結論なのか、それとも、第1段落の言葉に続くナポレオンの言葉を語り手が直接的引用ではないかたちで取り上げたものなのか、発言の帰属先が曖昧になってしまう。ここでテクスト外の事情を勘案するならば、第1段落でギユメに括られた言葉の多くが、参事官チボドーが著した『執政政府時代についての回想録』における参事院での議論の場面に見出されることがすでに指摘されており、バルザックがこのチボドーの著作を参照したことは疑いようがない[9]。第2段落の言葉にかんして、そのような著作に相当するものがいまだ見当たらないという限りにおいて、第2段落の言葉を第1段落の言葉から語り手が引き出した結論とみなすことも出来よう。しかし、あくまで語り手のディスクールという次元でこの「序言」の書き出しを捉えるならば、曖昧化への積極的な意図はもちろん見られないにせよ、発言の帰属先の曖昧さは払拭できない[10]。そしてこの曖昧さこそが、「おそらく、知らないあいだに、これらの言葉によって、今日読者に供している本書の種が私のなかに蒔かれたのであろう」という語り手の言葉に十分に呼応しているように思われる。すなわち、一者としての語り手に対する他者の声 —— 具体的な発話としての声 —— が、語り手の内部に響いているのではないか。

さて、語り手の説明によると、自分の著作の種はひとりでに、ほとんど彼の意志にさからって成長したという。ここで、一匹の悪魔に煽られたことが強調される。語り手はその悪魔をメフィストフェレスに喩えたり、「文学のトリルビー」と呼んだりしているが、この悪魔が語り手をそそのかすのも、何

---

[9] Voir Jean-Hervé Donnard, « À propos de d'une supercherie littéraire. Le "Bonapartisme" de Balzac », in *L'Année balzacienne*, Garnier, 1963, p. 128.　ただし、第1段落の言葉は、チボドーの伝えるナポレオンの言葉のみならず、ナポレオンに対しての反対意見のなかからも採取され、継ぎはぎされている。

[10] 実際、研究者のあいだに解釈のズレが見られる。たとえば、この部分を、ピエール・バルベリスは、ナポレオン自身の言葉に含めて解釈しており、他方、カトリーヌ・ネッシは、ナポレオンの発言から語り手が引き出した結論であるとみなしている。Voir Pierre Barbéris, *Balzac et le mal du siècle. Contribution à une physiologie du monde moderne,* Gallimard, t. II, p. 1067, et Catherine Nesci, *op. cit.*, p. 54.

よりもその声によってである。そもそも、この教唆する存在が著作の生成過程の説明にはじめて登場するのは、語り手のなかで響くひとつの声としてなのである。「社交界や実生活のことに気をうばわれている最中でも、私のなかにはいつもひとつの声があって、ひどく皮肉っぽい事実をわたしに暴露するのだった。」(905) 確かに、悪魔が声でそそのかすことには何の不思議もないが、この著作の生成過程の説明をくわしく吟味すると、教唆する声の存在がそこで決定的な役割を果たしているのが分かる。

悪魔は、本の内容と形式の両方を語り手に指示しながら彼に『結婚の生理学』を書かせていく。すなわち、本の内容としては、婦人のうっとりするような微笑が実は憎悪をあらわしているといった隠された真実を語り手に明かす一方、本の形式に関しては、模範にすべき成功した数々の本を彼の目の前に列挙する。とくに興味深いのは、書かれるべき本のタイトルが明かされる二つの場面である。一つ目は次のように描かれている。

> しばしばこの文学のトリルビーは本の山に座った姿であらわれた。そして、鉤型に曲がった指でいたずらっぽく二冊の黄表紙本を指し示したが、本のタイトルはきらきら光って見えにくかった。それから、私が目を凝らしているのを見ると、グラスハーモニカの音ぐらいに甘えるような声で綴りを読んだ ——『結婚の生理学』！(905)

この場面で、語り手は自分の目ではタイトルを読み取れない。悪魔の声が教えてくれるのである。また語り手はその声の具体的な調子も云い忘れていない。二つ目の場面も状況は類似している。今回悪魔が語り手に見せるのは、書籍の群れと書籍商売に携わる人々が荒れ狂う波に飲み込まれそうになっている情景である。そこで悪魔は、そんななか帆を立てて真新しく飾り立てて進み行く一艘の小船を指し示し、小船についた張り紙を「せせら笑いをしながら、かんだかい声で読んだ ——『結婚の生理学』！」(906)

その後、悪魔が現れない静かな数年間を経て、語り手はパリのサロンである逸話を聞き、それが彼の執筆をふたたび進めさせることになる。「突然、『姦通』という単語が私の耳元で鳴り響」(908) き、そしてそのとき以来、「この著作の運命的な主題に関するまことしやかな諸観念に悩まされた」(*ibid.*) という。語り手は、逸話の話し手の容貌を悪魔のそれに結びつけ、ここでも悪魔の教唆を暗示するが、実はその容貌の描写は逸話の引用の後に来る。逆に引用の前に語り手が書き付けていた印象は、「墓穴から出てくるように陰気な声」(907) という逸話の話し手の声にかんするものだけである。すなわち、

まず声が語り手を捉えるのだ。そして、当初語り手の外部で響いていた声が、作品冒頭のナポレオンの言葉のように、やがて彼のなかで響く声に変化したようにも考えられる。

さらにその後も語り手は、本について助言を約束してくれた社交界の二人の婦人のうちの片方を「コルネットをかぶった悪魔」（909）ではないか、と考え、もう片方の婦人からは、彼が本の完成および刊行をためらっている際、激励を受ける。そこで彼は婦人たちの「つつましい書記」（911）をもって任じるのだが、書記になるとはまさに他人の声に従うことであろう。しかも、省察 7 において、語り手自身が婦人たちを小説家の用いる「隠喩的人物」（987）と呼び、この二人が想像上の存在であることが明らかになるだろう。このように、悪魔自身が現れなくなってもさまざまな働きかけが語り手の内部で絶えず行われる。また、悪魔なしでも、隠された真実がほとんどひとりでに明らかになっていく現象が続く。語り手によれば、「自らが書かざるを得ないこの本のことを考えないようにしていたあいだにも、この本はあちこちで書かれていった。病院のベッドのうえで１ページ見つけ、閨房のソファーのうえでもう１ページ見出していった。」（910）

ここまで、「序言」に見られる、作品の生成過程に関する語り手自身の説明をたどってきた。確かに、自分以外の者に不本意ながら書かされたというこの説明は、スキャンダラスな内容をもつ本についてあらかじめ責任を逃れ[11]、同時に読者の興味をかき立てるためのものだともいえよう。しかし、注目に値するのは、ディスクールの主体の内部に響きながらその主体に属さない数々の声の存在である。それらの声が、この作品の生成のあいだほぼ一貫して、なおかつさまざまな形で語り手に『結婚の生理学』を書かせていっている。カトリーヌ・ネッシが端的に指摘する通り、『結婚の生理学』は「想像物の口述を書き取るという形で書かれた一群の虚構[12]」として読者に提示されている。そして、われわれにとって興味深いのは、この想像物が主体に対して他者の声として働きかけており、その声が、常に主体をうるさがらせるほどに主体から独立し、主体の制御から逸脱しているということなのである。

---

[11] 事実、省察 19 で語り手は、作品中に不適切な考えが見られるかも知れないことを、そそのかした悪魔のせいにしている。Voir *CH*, XI, p. 1087.
[12] *Op. cit.*, p. 72.

2. 観察、分析、洞察

語り手の内部に響く一連の他者の声が書かせたという『結婚の生理学』を、語り手はまた、「すべてが分析と観察」(912) の書であるともいっている。事実、この作品はバルザックによって『人間喜劇』のなかの「分析的研究」セクションに分類されている。

とはいえ、バルザックにおいては、その分析的作品のみならず小説的作品のなかでも、分析し観察する者が非常に重要な、本質的といってよい役割を担っている。『ゴプセック』という語りの入れ子構造を持った小説作品を取り上げてみよう。小説は、真夜中のグランリュー子爵夫人のサロンの場面から始まり、やがてそこでデルヴィルという代訴人が自分の若い頃の話をする。小説の大部分を占めるこの話に登場するのが、ゴプセックなる高利貸しである。デルヴィルはゴプセックに出会い、ゴプセックは自分が債権を取り立てているひとたちのことを話しながら、デルヴィルに自らの哲学を語る。したがって、この小説のなかで「語り手」のポジションを取るのは、小説全体の語り手、デルヴィル、ゴプセック、の 3 人である。いま登場人物にして語り手でもあるデルヴィルとゴプセックの二者に関してみてみよう。

金をめぐるいくつかの場面をデルヴィルに語って聞かせたあと、ゴプセックは次のようにいう。

> おい、人間のこころの最も隠された襞のなかにまでこのように入り込み、他人の生活に密着し、その裸形の姿を見ることは、つまらないことだと思うかい？光景は常に変わっていく。醜悪な傷、死ぬほどの悲しみ、ラブシーン、先にはセーヌ川の水が待っている赤貧、やがて絞首台にいたる若者の喜び、絶望の笑い、そして豪奢な祝祭。昨日は悲劇だ。どこかの親父さんが、子供を養えなくなったからと首をつる。明日は喜劇だ。どこかの若者が、私に向かってディマンシュ氏の場面をこの時代の装いで演じようとするだろう。[…] これらの崇高な俳優たちは私ひとりのために演じたが、私は騙されなかった。私のまなざしは神様のまなざしのように、あらゆる心の中を見通すのだ。私から隠れられるものはない。(II, 976)

ゴプセックは、どんな人間の秘密も見抜いていて、その生活を知っているという。ある場面をデルヴィルに語りながら、彼は「私は（その少女を）見た。一目で私はすべてを見抜いた」(II, 975) とも言っている。そのようなゴプセックに関して、デルヴィルは彼が「人間性について哲学的観察」(II, 995) をしていると評している。一方、デルヴィルは自分自身については次のように

語る。

> 生まれつき観察家である私は、自分が扱っていて人間の情念が激烈にそこで問題になっている利害訴訟の場では、意図せず分析的精神を発揮しました。（II, 1001）

ゴプセックは卓越した観察家として他人の秘められた物語を語る。デルヴィルもまた、そのゴプセックと同じように、観察し、分析し、洞察する者として、ゴプセックのことを語る。さらに、『ゴプセック』という小説全体の語り手にしても、登場人物や小説空間の事物をその非常な細部にまで描写し、それらを意味づけたり、それらの意味するところを暗示したりしながら、語り手としてのゴプセックやデルヴィルと同じ方法に従っていると言えるのではないだろうか。そして、『ゴプセック』全体の語り手が、バルザックの数多くの小説を語る匿名の語り手と同一タイプであるとするならば、「観察、分析、洞察」は、バルザックの小説の本質的な方法、いいかえれば、現実世界を捉え描き出すバルザックの本質的な方法であるとさえ言えるだろう[13]。

この観点から非常に興味深いのは、バルザックがエミール・ド・ジラルダンらとともに創刊した新聞に 1830 年 3 月に掲載された、『結婚の生理学』の書評記事である。バルザック自身が書いたとされるこの記事において、「生理学」の語は次のように説明されている。

> この生理学という言葉自体は、その見かけほどおそろしいものではない。医学において、この言葉の意味するところは単に、自然が各器官を組み立てた体系にしたがってそれらの用途を知り、必要であればそれを見抜く技術ということである。したがって、結婚の生理学とは、夫の、そしてとくに妻の行動の隠れた目的をその外見によって見抜き、出た結果をほんの些細な手順にも応用し、ある種の厄介な事態から、もし身を守れるとすれば、身を守るための技術だということになるだろう[14]。

---

[13] ここでわれわれは、「観察（observer）」「分析（analyser）」「洞察（deviner）」これらの行為の内実を、『人間喜劇』全体として、あるいは作品ごとに、細かく確定しようというのではない。また、それらの意味するところが常に同一であるとまで主張するのでもない。しかし少なくとも、バルザックの作品世界を支える認識・表象装置として、これらの行為（の主体）が本質的な役割を果たしているということは、以上の『ゴプセック』の例を通じて明瞭に確認される。

[14] *Feuilleton des journaux politiques*, 17 mars 1830. Voir Balzac, *Œuvres diverses*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade »,

書き手の身元の問題に加えて、この記事に述べられている考えそのものが重要である。なぜなら、ここでは医学的な意味における生理学が、「見抜く」ということによって結婚生活と結び付けられているからである。確かに、この医学的視線による「見抜くこと」「洞察すること」が、「すべては分析と観察」の書であると語り手自身のいう『結婚の生理学』において本質的な部分を占めている。ところが、夫の欲望でもあり語り手の戦略でもある「妻の真意を見抜き、姦通を防ぐこと」はやがて失敗する。その様相をディスクールの流れにしたがって、次節で検証してみたい。

3. 医学的視線、記号学的視線

『結婚の生理学』のタイトルどおり、語り手は医学的な目をもって結婚問題に取り組む意思をはじめからはっきり示している。省察 1 の末尾で、語り手は読者に向かって、自分の議論において、「結婚」という一見論じ尽くされたかに思える主題、ならびに一見軽薄に見える語り口を受け入れてくれるように依頼するが、そのさい、次のように述べる。

> 結婚のことで冗談をいっている場合か、とは！　われわれが結婚を皆がかかる軽い病だと考えていて、この本がその個別研究であることを推察していただけないだろうか？（920）

こうして結婚は医学の対象とされる。ここで医学の用語に関する問題に触れておこう。本来、病気を研究する医学は病理学と呼ばれ、生理学のほうは、バルザックが書いたとされる『フユトン・デ・ジュルノ・ポリティック』の記事が示唆するように、生命組織の機能の研究に携わる。『結婚の生理学』における名前と内容のズレ（のように見えるもの）を説明するには、『臨床医学の誕生』のミッシェル・フーコーの考察が助けになる[15]。フーコーによると、18 世紀末に、医学に関する二大神話が生まれたという。ひとつは、国家化された医療が、魂に奉仕する聖職者にならって身体への力を行使するのだというもの。もうひとつは、健全な社会が回復されることで病気は完全になくなるだろうというもの。これらの神話のなかで、医学はもはや単なる治療行為

1990-1996, 2 vol., t. II, pp. 673-675.

[15] Voir Michel Foucault, « une conscience politique » in *Naissance de la clinique,* 4e éd., PUF, 1978, pp. 21-36.

全般にとどまらず、「病気でない人間」であると同時に「模範的人間」でもあるところの「健康な人間」という概念を包摂するようになる。こうして「正常」という概念が重要になり、「生理学的知識というものは、かつて医師にとってさして大事ではなく、単に理論的なものに過ぎなかったのだが、あらゆる医学的考察の中心に据えられることになる[16]。」したがって、病理学と生理学は表裏一体のものとなるのである。

また、省察 5 では、妻の姦通を運命付けられたさまざまな夫たちを描写してから、語り手は自分を卓越した外科医になぞらえる。「ここまでの省察のなかでわれわれは、その下に恥ずべき傷を隠してひとを欺く人体組織を勇敢に切り開く外科医の不遜な大胆不敵さで、病の広がりを明らかにしてきた。公衆の徳は、われわれの階段教室のテーブルの上にうつされたが、いままではメスのもとに死体をさらしてさえ来なかった。」(955-956) この箇所には、語り手が問題を扱うみずからの姿に死体解剖のイメージを付与しているのが見て取れる。

さて、省察 1 から「蜜月について」と題された省察 7 までは、それに続く部分のための準備作業に費やされていると言える。省察冒頭部、語り手自身が本のそれまでの内容を自ら要約しながら、次のように述べている。

> こうして、社会を蝕んでいる隠れた病をはっき告発したあと、われわれはその原因を、法の不備、風俗の乱れ、人々の無能、われわれの習慣の矛盾などのうちに探し求めた。なお考察すべきことがただひとつ残っている。それはこの病の進行である。(976)

実際には、社会全体が病んでいるのである。医学的視線の対象は、個人の次元から社会の次元へと拡大されている。妻の姦通を観察し分析してその原因を見抜くことは、同時に社会の機能不全の原因を見抜き、明らかにすることなのである。ナタリー・バセは次のように指摘する。「結婚を通してバルザックが研究するのは社会体 (corps social) である。[…] そしてこの組織、この病んだ社会体に向かって、バルザックは医学的生理学の体系的な方法を応用するのだ[17]。」『人間喜劇』を想起させるこうした戦略を持ちつつ、語り手は、

---

[16] *Naissance de la clinique, op. cit.*, pp. 35-36.

[17] « La *Physiologie du mariage* est-elle une physiologie ? », in *L'Année balzacienne*, PUF, 1986, p. 106.　また、『結婚の生理学』を取り上げて、生理学、病理学とバルザックの社会観察の方法との関係をコンパクトに考察しているものとして、以下のものも参照。本稿でも示唆を受けた。Cf. 松村博史、「『結婚の生理学』の教えるもの —— 夫婦生活

蜜月のあとに必ずやって来る「病の進行」とともに、妻の姦通をいかに防ぐかというこの作品の本題へとはいっていく。

省察 7 の最後、姦通へと妻が動いていく第一段階のことを、語り手はここでもやはり医学用語を用いて、「最初の症候」と呼んでいる。したがって、妻の姦通は夫が医者のように対処すべき病とみなされているのである。これ以後、「最初の症候」と題された省察 8 から「最後の症候」と題された省察 27 まで、妻が姦通へと漸次進んでいく一連の流れが叙述される。語り手は、寝取られ亭主になりかねない夫に対してその対処法をもっともらしく教授する。姦通へと向かう病の進行を食い止めるためには、「生理学者」として症候をただしく見分けなければならない、と。「才気ある男であれば、謎めいた兆候、気づくか気づかないかぐらいのわずかなしるし、妻が意図せずふと漏らしてしまう秘密、これらを見分けることが出来るはずである。」(988) つまり、病の進行と闘うには、「医学的記号学[18]」が必要なのである。

省察9が第1部のエピローグをなし、その次の省察10から第2部が始まる。第 2 部が「内外の防衛手段について」と題され、第 3 部が「内戦について」と題されていることからも明瞭なように、語り手は姦通防止法を教授する際に政治的あるいは軍事的比喩を多用する。この比喩によって夫と妻の問題は政府と民衆の問題とはっきり二重写しになり、政治諷刺的意味合いをもつ。これはテクストのジャーナリスティックな性格をよく示しているといえるが、同時に重要なことは、生理学的＝記号学的方法と妻や民衆を支配するための方法とが重ね合わされることによって、ここで問題になっている、夫にとって支配すべき妻というものが、バルザックのように世界を観察し分析しようとする作家にとって解読して制すべき「現実」と重なってくることである。

語り手は読者である夫に対してさまざまな戦略を提案するが、当然その本質は妻を観察し、分析し、その秘密を見抜くことにある。たとえば、妻を無知なままにさせておくこと（省察 10）や、妻と外部のコミュニケーションを厳しく取り締まること（省察 14、20）なども、その目的は記号学的視線にとっての障害物を取り去ることにほかならない。

以上のようにして、『結婚の生理学』全体が、医学的＝記号学的視線でもって妻、社会、ならびに現実を観察し、分析し、そしてそれらの隠された真実を見抜きたいという欲望によって支えられていると言える。フェミニストと

と病理学 ——」、『バルザック —— 生誕 200 年記念論文集』、日本バルザック研究会、駿河台出版社、1999、271-283 頁。

[18] Catherine Nesci, *op. cit.*, p. 55.

しての観点から、カトリーヌ・ネッシは、ミッシェル・フーコーの『監獄の誕生』に準拠しつつ、『結婚の生理学』のなかに、ブルジョワ亭主権力が厳しい監視によって女性を知の対象として支配したがっている、その欲望を読み取っている[19]。本稿の目的は、このフェミニスト的解釈の是非を問うことではない。ただ、『結婚の生理学』が、これまで述べてきた認識の戦略というものの崩壊を非常に鮮やかに表現しているというネッシの指摘は重要である。

何度となく語り手は、女性を支配するための方法を説明しながら、その目的の困難さを表明する。それによって、語り手のディスクール全体を通じて夫側の危機が進行し続けることになる。たとえば省察 17 では睡眠が夫の盲点とされ、やがて省察 23 で「内戦」が勃発すると、つまり妻が自覚的に姦通のために戦いはじめると、語り手はかなり悲観的になる。このとき障害として挙げられる「女性の使う目くらましの術」(1125) という言葉が、ことが認識の問題であることを示唆する。続く省察 24 では、悲観の度合いは一層深くなる。

> 実際のところ、こうした秘密の戦略のあらゆる手段をいざ用いなければならないときには、あの悪魔のごとき生き物に罠をかけようとしても、しばしば無駄である。一度妻がどうしても隠そうと思い至ると、彼女らの顔は虚無のように真意の窺い知れないものとなる。(1130)

肝心なときに推奨した方法が役に立たないのだから、ここでこの本の（見かけ上の）目的が語り手自身によって否定されていることになる。さらに省察 26 では、「ある恐ろしい武器、妻が手にする最後の武器が使われることによって、夫は必ずや打ち負かされることになる」(1170) と夫側の敗北が避けられないものとして宣告されてしまう。つまりそもそも夫というものは寝取られ亭主になっていくものだというわけである。

夫の敗因は、妻のことが解読できないことにある。カトリーヌ・ネッシはこの問題が現実を言語の体系のうちに統御することが出来ないという問題にほかならないと見て取っている。

> このロゴス中心主義の敗北は、次の事実と密接に関連している。すなわち、分析行為は、説明のための体系を作って現実を統御するという状況を確立するこ

[19] ネッシは、この「女性の身体の政治的解剖」にかんして、著書の第 2 部において詳述している。Cf. Catherine Nesci, *op. cit.*, pp. 79-134. 『監獄の誕生』への言及は、特に次の箇所に見られる。Cf. *Op. cit.*, pp. 77-78, 116-118.

とも安定化させることも出来ず、言語作用は意味と記号とを調整するその能力を奪われた状態になっている、という事実である[20]。

われわれはここで「ロゴス中心主義」という用語には深く立ち入らない。われわれにとって重要なことは、この『結婚の生理学』の「ディスクールの自己転倒」とでも呼ぶべきものが、単なる科学的方法のパロディーの意味を超えて、バルザックの本質に関わる問題を提起しているということである。語り手は、その「すべてが分析と観察」である作品において、対象の洞察と認識が最終的に不可能であると認める。すでに見たように、「観察、分析、洞察」がバルザックの小説における本質的な方法であるとみなし得るからには、ここにバルザック的な認識論的問題を見出すことが出来よう。

さて、すでに引用した省察 24 の一節には、「彼女らの顔は虚無のように真意の窺い知れないものとなる」という表現があった。顔の表面の情報から内面を見抜くという方法は、明らかにラヴァターの観相学を想起させる。実際、省察 15 において語り手は、そのラヴァターと骨相学者のガルに賛辞を捧げ、妻を支配するためのこの方法の重要性を強調している。ところが、実践場面を説く語り手自身のディスクールが、観相学的方法の有効性に対する疑問符を読者に抱かせる。さらに続く省察 16 ではこの方法の無効性を語り手自身が認めてしまう。ディスクールの方向が夫の敗北へ、生理学的視線の敗北へとはっきり定まり、カトリーヌ・ネッシが、現実を前にした言語システムの限界という命題を導き出しているこれら 2 つの重要な省察のうち、本稿では、「そそのかす者たちの声」の問題につながる省察 15 を以下に検討したい。

---

[20] *Ibid.*, p. 192. 言語と関連付けられた「体系」の概念について、ネッシはロラン・バルトに拠っている。彼女はバルトの次の言葉を引用している。「体系は閉域である（つまり単義的である）から常に神学的で教条主義的である。体系は二つの幻想で生きている。ひとつは透明性の幻想（陳述するために使用している言語は単に道具的だとみなされているが、それはエクリチュールではない）であり、もうひとつは現実性の幻想（体系の目的は、それが適用されること、つまり、言語の枠を出て、誤って言語の外在性そのものとして定義された現実世界の基礎付けに向かうことである）である。これは、厳密な意味で偏執症的な狂気であり、その伝達路は固執、反復、教理問答、正当性である。」Voir Roland Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, Éditions du Seuil, « Points Essais », 1980, p. 114, cité par Nesci, *op. cit.*, p. 138. われわれがこのバルトの定義を採用するのは、『結婚の生理学』の語り手のいう「生理学的」方法についてはこのバルトの定義が適切であると考えられるゆえである。ただし、バルトは、上記の引用と同じ箇所で「体系の戯れ、動き」である「体系的なもの」と「体系」とを区別しているが、われわれは、「体系」の形容詞「体系的な」を、バルトによる「体系」の定義にしたがって用いる。

4.「巨大な細部」

「税関について」と題された省察 15 は、唐突に対話体で始まる。読者には、ギユメで閉じられて応酬されるセリフの言葉から、それが語り手とある婦人のあいだで交わされている対話であることが推察される。はじめに婦人が、省察 14 で語り手が提示した考え —— 住居において徹底的に妻を監視すべし —— が非常に不適切であると告げると、語り手が監視の正当性を主張する。すると、婦人は「夫婦の税関」のためのラヴァターの諸原理の重要性を説く。このセリフを受けて語り手がラヴァターとガルを礼賛するのだが、この語り手のセリフの頭にはギユメがなく、婦人への応答で始まったはずのそのセリフはほどなく本来の語り手のディスクールに戻る。一方、婦人の方は何の説明もないまま、それきり語り手のディスクールに介入することなく消えてしまう。

観相学の方法についての婦人と語り手による説明は、この方法が妻を「観察し、分析し、見抜く」という手順にまさに対応していることを示している[21]。婦人によれば、夫に求められるのは「ひとの考えをおもてに表してしまうどんなにちょっとした肉体上の兆候も、驚くほど素早くとらえ判断できるように、観察眼と理解力を養っておくこと」(1044) であり、また、語り手はラヴァターとガルを次のように賞賛する。「ラヴァターの観相学は、真の科学を生み出した。それはついに人間の諸知識のうちに座を占めたのである。この本の登場は、当初いくつかの疑いや揶揄に迎えられたが、やがて有名なガル博

[21] 本稿では、ラヴァター観相学それ自体、および、19 世紀初頭のフランスにおけるラヴァター観相学の受容模様については詳述しない。ただ、観相学が流行した背景として、当時、都市への大規模な人口の流入現象があったことは指摘しておこう。互いに見知らぬ者同士が群集の一員として街路ですれ違うという状況のもたらす不安が、相手を「観察し、分析し、見抜く」観相学を強く要請したと考えられる。こうした観点を含めて、観相学の歴史や 19 世紀前半における観相学・骨相学・「生理学もの」の流行について、次の論考がコンパクトに紹介している。バルザックへのまとまった言及もある。Cf. 菅谷憲興「身体と言説（ディスクール）—— ブヴァールの髪の毛をめぐる一考察」、『仏語仏文学研究』、第 15 号、東京大学仏語仏文学研究会、1997 年、104-114 頁。また、この「学」が『人間喜劇』のさまざまな作品のなかで具体的にどのように用いられているか、その全容を詳細に検討することも本稿の枠を超えることである。確かにバルザックは、ラヴァターの観相学を彼の作品全般にわたって、彼流の解釈のもとに適用しているといえる。ただし本稿で扱うのは、あくまで『結婚の生理学』で披瀝される、この記号の「学」に関する考えに限定される。『人間喜劇』全体における観相学の使われ方を研究したものとして、次のものを参照のこと。Cf. Régine Borderie, *Balzac, peintre de corps. La Comédie humaine ou le sens des détails*, SEDES, « Collection du bicentenaire », 2002.

士があらわれ、見事な頭蓋骨の理論によって、件のスイス人の体系を仕上げ、彼の鋭く明晰な観察をしっかりしたものにした。」（*ibid.*）このように、観相学は、卓越した観察による体系的科学であると手放しで称揚されている。

当然、語り手は、読者＝夫たちに対して、この方法を「夫婦の税関」のために、つまり妻を狙っているかもしれない来客を吟味するために活用するよう勧める。訪ねてきた独身者が家の戸口でする仕草を 20 例ほども列挙し、その観察事項の多さを指摘した後、語り手は、独身者が入室し、夫婦と同席する場面に関してこう結論づける。「声の響き、物腰、気まずさ、微笑、沈黙でさえも、また悲しみ、あなたに対する気遣い、すべてが徴候であり、すべて一目で苦もなく吟味されなければならない。」（1047）こうした徴候を的確に読み取り洞察することこそ、『結婚の生理学』で一貫して要請されてきた視線である。しかし、語り手はここで次のように付け加える。

> この主題の巨大な細部（immenses détails）を列挙することはとても出来ないから、その手間は読者の慧眼にすべてお任せする。この学問の広がりにお気づきのはずだから。それはまなざしの分析に始まり、短靴の繻子の下か長靴の皮の下に隠れた足の指が悔しい気持ちのために示す動きを感知することに終わる。（*ibid.*）

「隠した足の指」という例には、観相学を茶化そうとする意図がうかがえるが、作品の諷刺的性格を考慮すれば不思議ではない。むしろ、「巨大な細部（immenses détails）」という撞着語法的な表現が注目に値する。一見、ここでの « immenses » はごく単純に「巨大な」という意味にとれる。しかし、巨大になった「細部」は、もはや、分析される最小単位という細部としての属性を持たないのではないか。この「巨大な細部」のひとつひとつがさらにその細部をもち、そして新たな細部にはまた新たな解釈が必要になってくるように思われる。したがって、« immenses » という語はこの « immenses détails » という表現において「無限の」という意味あいも含んでいるのではないだろうか。読者に対するバルザック小説の細部のはたらきの問題を取り上げながら、ジョエル・グレーズは、バルザックの用いる「卑小さの偉大さ」といった表現や、あるいは作家が些細なはずの出来事に大きなスケールや重大な意味を与えている箇所などについて、次のように述べている。

> その細部自体がひとつの縮小された、縮約された全体になる。［…］この「細部にして全体」はおそらく、バルザックの小説において、「まとまりとしての全体」に対する異議申し立ての極端な形となる。というのも、この細部は自律性やもしかすると独立性を与えられるかも知れないからである。そして、そこになさ

れる解説は、解釈のひとつのモデルを示すことになる。すなわち、断片にひとつの意味深い全体をみること、ひとつの細部を他と切り離してそれ自体として味わうこと。細部が巨大になってひとつの全体を形作るかも知れず、またそうなるはずだとするなら、読者の視線はついお留守になり、脇に逸れ、決められた読みの枠組みの外へ出てしまうかもしれない[22]。

この指摘は、バルザック小説の細部の問題、および、読者の視線の問題として発想されているが、『結婚の生理学』の « immenses détails » という表現や生理学者を自任する語り手の視線についても話は同じであろう。こうした状況では、たとえ『結婚の生理学』の語り手が自身の方法について「体系」という語を何度も使って語っていても、体系的なかたちで認識対象を統御することは不可能となる[23]。

それでは、生理学的な「観察」はどのようになされているのか？　この作品において「観察、分析、洞察」とは実際いかなる現象なのか？ 同じ省察

---

[22] Joëlle Gleize, « "Immenses détails". Le détail balzacien et son lecteur » in *Balzac ou la tentation de l'impossible*, Études réunies et présentées par Raymond Mahieu et Franc Schuerewegen, Groupe International de Recherches Balzaciennes, SEDES, « Collection du bicentenaire », 1998, p. 104. グレーズはバルザックの « une civilisation immense de détails » や « l'immense vérité de détails » といった表現例も挙げている。ただわれわれが引用した『結婚の生理学』中の箇所は引いていない。Voir art. cit., pp. 98-99.

[23] 『結婚の生理学』の語り手の使う「体系（système）」の語に関しては、18、19 世紀に広く受け入れられていたコンディヤックの次の定義に準拠したものと一応は考えておいてよいだろう。「体系とは、知識や技術のさまざまな部分を配置して、それらすべてが互いに支えあい、後からの部分が始めからの部分によって説明されるようなひとつの秩序にまとめることにほかならない。他の部分の説明になる部分は原理と呼ばれる。そして、体系というものは、この原理の数が少なくなればなるだけ、完璧に近づく。原理がひとつになることこそ望ましい。」Voir Condillac, *Traité des systèmes* in *Œuvres philosophiques de Condillac*, texte établi par Georges le Roy, PUF, 1947, t. I, p. 121.ちなみに、マックス・アンドレオリは、『結婚の生理学』で用いられている « système » という言葉は、しばしば「手順、やり方、方法」などの意味で使われている、と指摘する。彼によると、その「手順、やり方、方法」は、彼の主張する「バルザック的体系（système balzacien）」に関連しており、そして、このようにバルザックが « système » という言葉を少々乱用気味なほど使うことに、アンドレオリは「調和や有機組織に対する深い欲求」を認めている。Voir Max Andréoli, *Le Système balzacien. Essai de description synchronique*, Lille, Atelier de reproduction des thèses, 1984, t. I, pp. 20-29. 同書において、アンドレオリは基本的に『人間喜劇』を、相互に作用しあう諸要素の閉じた全体とみなしたうえで、その深い統一性を探求している。Voir *ibid.*, t. I, pp. 2-33. こうした立場からの彼の解釈も決して無根拠なものではないが、むしろ『人間喜劇』の不均質な面に注目するわれわれからすれば、彼の指摘する「手順、やり方、方法」が、少なくとも『結婚の生理学』という作品においては顕著に、われわれの定義づけにおいて「体系的である」と言えるだろう。

15 で「巨大な細部」の一節に続く箇所をみてみよう。

来客についての話題のあと、語り手は、読み手である夫に、観相学的観察を今度は妻本人に適用するように勧める。

> 唇のほんのちょっとした動き、鼻孔のほとんど気づかないほどの収縮、瞳孔のそうとは感じられないぐらいの拡散、声色の変化、[…]、なにもかもがあなたにとっては言葉（langage）である。
>
> その妻がそこにいる。みなが彼女を見ているが、誰も彼女の考えを見抜けない。しかし、あなたにとっては、彼女の瞳がやや色づいたり、広がったり、収縮したり、まぶたが揺れ、眉が動いたのだ。[…] あなたからすれば、妻は言葉を話したのである（la femme a parlé）。（1048）

来客の場合は、その身体および身体の動きの全体が観相学的視線の対象となっていたが、妻の場合に問題になっているのはその顔だけである。とはいえ、妻の顔のどの細部も、解読しようとする夫に対していつ「巨大」にならないとも限らないのだから、体系的な観察理論の力が当てにならないのは同じことである[24]。また、妻の内面の解読は、普遍的コードを用いた結果というより、夫の個人的能力によってなされているように見える。

重要なのは、ここで読み取られた妻の観相学的徴候が、ランガージュ、そしてとりわけパロールとみなされていることである[25]。観察や分析を行いながら、生理学者は、観察対象が自らの秘密をあかすそのパロールを聞いている。つまり、彼にとっては、「観察し、分析し、見抜く」ということは、彼にたいして秘密を暴露する声を聞くことなのである。たしかに、上記の引用文の直前には「結婚した男は妻の顔をじっくり研究しておかなくてはならない」（*ibid.*）とあり、解釈体系に基づいた日々の研究によって、夫が妻の身体的徴候を言語的メッセージとして観察、分析できるようになったと言えなくもない。しかし、この秘密を明かす声の準拠するべき解釈体系というものが真に確固としたものではないとすれば、実質的には、この不完全な体系の適用ではないかたちで観察が行われているのではないだろうか。とすると、秘密を明かす声は体系とは無関係に介入してくるものであるはずだ。それは解釈

---

[24] 実際、すでに見たように、第 3 部にはいると妻の表情は真意のうかがい知れないものとなってしまう。

[25] 夫婦の家の戸口に立つ独身者のさまざまな仕草を吟味する際にも、語り手は観察対象である独身者について、「家に入るときには、口さえあけずに彼はなんと多くを喋ることだろう！」（1045）と記している。観察者にとって、独身者の仕草は「言葉」なのである。

体系の結果として現れるのではない。むしろ、秘密を明かす声の方が解釈を提供するのではないだろうか。

すでにみたように、『結婚の生理学』の全体が、医学的＝記号学的視線でもって妻、社会、ならびに現実を観察し、分析し、そしてそれらの隠された真実を見抜きたいという欲望によって支えられている。省察 15 の段階では、夫側の医学的＝記号学的視線の挫折は、まだ予兆に過ぎない。いま、その視線による認識が解釈体系に拠らないのであれば、夫が勝利者として聞けるはずだと思っている真実の声とは、実質的には、みずからの論理を対象にあてはめた結果に過ぎないことになる。

医学的視線と対象の声とのこの（仮定された）透明な関係にかんしては、ミッシェル・フーコーが『臨床医学の誕生』で触れていた臨床医学的な視線が、われわれにとって魅力のある仮説に思われる。彼によれば、18 世紀末に認識論上の変化が起き、現代医学、臨床医学が誕生したという。初期の臨床医学者は、死体解剖による人体内部の新発見とコンディヤック流の言語モデルや「分析」の方法の導入によって、病が可視的なものであり、「病の実体は、その真実性において完全に言い表され得る[26]」と考えた。このとき、「観察」とは、対象の声を聞く、ということに等しくなる。

> 臨床医学的な視線には、ある光景を知覚した瞬間にある言語を聞くという逆説的な特性がある[27]。

この視線にとってはむしろ体系も理論も想像も邪魔であり、純粋な観察の視線さえ向ければ、対象自身が言葉となって立ち現れる、という。しかし、フーコーは、一見透明で解放されているかに見える臨床医学的視線は、実際のところ、そもそも視線と視線の対象とのあいだに非常に強固な枠組み（「同一のロゴス[28]」）が前提されてはじめて成立する、と指摘する。

この文脈をどこまで承認するかは充分検討を要する課題だが、少なくとも、『結婚の生理学』において、夫が妻の仕草を「観察し、分析し、洞察し」得たとみなすこと、あるいは、バルザック小説の典型的な語り手が現実そのものを認識し、表象し得たという姿勢をみせることは、実際には、夫や語り手側の論理を対象に押し付けているということになるのではないだろうか[29]。

---

[26] *Op. cit.*, p. 94.
[27] *Ibid.*, p. 108.
[28] *Ibid.*, p. 109.
[29] ジャック・ネフが正しく指摘するように、バルザックの作品において、物語の具体

それは常に、妻や現実のはらむ不透明な影に脅かされることになる。

ここで想起されるのが、語り手をそそのかす他者の声である。第1節でみたように、『結婚の生理学』冒頭の「序言」において、語り手は、自分のなかに響く自分のものではない一連の声に強いられるようにして、この本を執筆したことを語っていた。それによれば、「わたしの中にはいつもひとつの声があって、ひどく皮肉っぽい事実をわたしに暴露するのだった。」(905) 舞踏会の真っ只中、悪魔が語り手に「あのうっとりするような微笑が見えるかい？あれは憎悪の微笑だよ」(*ibid.*) などと告げる。また、悪魔があらわれなくなっても、隠された真実がほとんどひとりでに明らかになっていく現象が続く。「自らが書かざるを得ないこの本のことを考えないようにしていたあいだにも、この本はあちこちで書かれていった。病院のベッドのうえで1ページ見つけ、閨房のソファーのうえでもう1ページ見出していった。[…] 一つの身振り、ひとつの言葉がわたしの尊大な頭を豊かにした。」(910) こうした現象は、悪魔によって明かされるものであろうと、ほとんどひとりでに明らかになるものであろうと、外部から内部へ向かうという点で、観相学的な観察と共通する。しかし、この語り手という主体のなかで響くそそのかす声は、常に主体をうるさがらせるほどに主体から独立し、主体が制御できないものであった。

したがって、語り手が提示する観相学的方法というものは、自由に使いこなせる体系的なコード解読法ではない。語り手自身、この「観察、分析、洞察」からなる方法を主体的にわがものとして行使できていない。本質的には、それは他者の声によって彼に押し付けられたものなのである。

おわりに

もともと『結婚の生理学』は、当時流行していた「法典もの」、なかんずくブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』にあやかって発想された「冗談[30]」(バルザック自身の言葉) であり、その後中絶していたプレオリジナル版を出版

的な場面とその抽象的な説明との関係は、前者が後者を例証すると同時に後者が前者を正当化するという相互依存的なものである。これをネフは「バルザック的トートロジー」と呼んでいる。Voir Jacques Neefs, « Les trois étages du mimétique dans La Comédie humaine » in *Balzac, Œuvres complètes. Le « Moment » de La Comédie humaine*, textes réunis par Claude Duchet et Isabelle Tournier, Presse de l'université de Vincennes, « L'imaginaire du texte », 1994, p. 154.

[30] Voir René Guise, « Histoire du texte » à la *Physiologie du mariage*, in *CH*, t. XI, p. 1743.

社に請われて増補完成させたのが初版であった。結婚生活という秘め事を扱ったおかげか評判を取り、バルザックの名がはじめて人に知られることになる。こうした経緯を考慮すれば、ディスクールの非一貫性も悪魔による教唆の強調も「冗談」の一部であり、そうした「冗談」を排除した部分のみを研究する、という態度が正当なものに見える。

しかし、その一方で、初版刊行後もほとんど加筆、訂正を経ないまま、後年この作品が『人間喜劇』の「分析的研究」セクションに含められている事実は無視できない。このセクションは、著者自身が『人間喜劇』が含む3つのセクションのうちの最上位におき、「結果」と「原因」を踏まえて「原理」が探求されるべき場としているものだ。まして1846年の時点では他の該当作品が未刊行であったため、『結婚の生理学』が、「分析的研究」セクションに含まれる唯一の作品、すなわち、『人間喜劇』の頂点に位しているのである。

われわれは、「観察し、分析し、洞察する」という方法が、バルザックの典型的な語り手の態度であると同時に、『結婚の生理学』の語り手が提示する生理学的方法であることを示し、さらに、その生理学的方法の挫折、否定を、現実を包括的に認識・表象したい作家の欲望とそれを許さない現実との葛藤の問題に関連づけて考えてみた。このパースペクティブにおいて、「序言」にあらわれていた、語り手の内部のそそのかす声たちは、作家が依拠しようとする体系に常に裂け目をいれて作家を導く「現実」の声とも言えよう。

なお、本稿では、「ディスクールの自己転倒」をよりはっきり示している省察16を扱っていない。ここには、「そそのかす声たち」とは違ったタイプの「語り手の内部に響く他者たちの声」が関わっている。稿をあらためて検討したい。